

Carson McCullersの魔女 ——*The Ballad of the Sad Café*をめぐって——

長 岡 亜 生 *

Carson McCullers's Witch in *The Ballad of the Sad Café*

Aki Nagaoka *

Received October 31, 1997

I

Cousin Lymonに対して、深いけれども一方的な愛情を寄せるMiss Amelia Evansの表情が“lonesome look of the lover”¹と描写されるように、Carson McCullers(1917-67)の*The Ballad of the Sad Café*(1943)において愛と孤独は切り離せない関係にある。作品の冒頭近くで提示される愛の一方向性と非継続性の論理に従い、どの場合の愛情関係も成就することはない。McCullers作品を貫くようにみえるこの愛と孤独のテーマについての議論が、おもにこれまで批評家の研究の中心であった。²

この作家の描く女性登場人物に関しては、グロテスクなフリーク性と両性具有性の観点から論じられている。*The Member of the Wedding*(1946)の主人公Frankie Addamsは、背の高い、少年のような12歳の少女であるが、³ 見世物小屋の奇形(Freak)、「男女(おとこおんな)」(“Half-man Half woman”)に秘められた自己の顕現をみる。*The Ballad of the Sad Café*の中心人物Miss Ameliaは、なるほどFrankieが成長した姿にみえる。身長6フィートを超すこの大女は、フリークの容貌が強調され、アメリカ南部の、あるいは女性によるゴシック小説の伝統のなかで論じられてきた。⁴ *Ballad*が10年間にわたる*Member*執筆中に短期間で仕上げられたことを考えれば、ふたりの主人公が重なってみえても、共通して結婚のモチーフが奇妙なかたちで提示されても不思議ではない。⁵ しかしAmeliaは、おてんば娘が単にグロテスクな姿として極端な結末を迎えただけの人物ではないのである。

Leslie Fiedler は、Frankieなどの「少年のような女の子」にみられる両性具有性を短絡的にレズビアニズムと結びつけ、こうした人物を社会的に容認されるべきでない脅威的存在とみなす(333, 476)。それに対して作中人物の両性具有性を肯定的に評価する批評家もいる。Louis Westlingは“Carson McCullers's Tomboy”のなかで、おてんば娘の両性具有性を芸術的野心との関連で論じ、Barbara A. Whiteは、男であれ女であれ両性具有的な人物にこそ作家の共感がかつとも大きくあらわれると考え(100)、とりわけMcCullers作品の少女についての議論を発展

* 外国語学部
Faculty of Foreign Languages

させる。Miss Ameliaについては、Westlingが“Carson McCullers’ Amazon Nightmare”において、その男性的資質ゆえの才能、支配力をたたえている。しかしWestlingは、*Ballad*は完全に女性性を欠いた世界を成すのであり、最終的に「男」としてAmeliaは成功できないと結論づける。

Ameliaはたしかに伝統的な意味での男性的資質を顕示する。しかしながら男性的とはいえない神秘性、魔力さえもちあわせている。アメリカ南部の小さな田舎町を支配するいわば魔女のようにみえるのである。両性具有性を有するともいえるけれども、「男」として生きるために「女性性」を完全に排除したのではない。魔女としての特異な女性性を獲得しているのである。さらにこの魔女には悪のイメージがこめられているのではない。むしろ後のレズビアン・フェミニストらによって精神的・政治的モデルとして掲げられた魔女と結びつくように思われる。そうした観点から本論では、McCullersが創造した魔女がいかに作家のフェミニスト的意識を表現しているかを論じたい。

II

Miss Amelia Evansは、皮肉にも生前の父に“Little”と呼ばれていたが(212)、「それ自体女性にとってふつうではない」くらい背が高いうえに、生まれつき色が黒く、斜視の「変な」顔立ちである(206)。「男性のような」たくましい筋骨をもち、力もけんかも強く、ボクサーとして名を馳せる(245)。そしてほとんどいつも作業着にゴムの長靴といういでたちである。

こうした堂々たる風貌だけでなく、さまざまな面において発揮される彼女のすぐれた技術も読者を圧倒するに十分である。父の遺産の建物で雑貨屋を営み、秘密のウイスキー醸造所を所有するAmeliaは、ビジネス面にすぐれた才能を示し、町いちばんのお金持ちとなっている。あらゆる点で手が器用で、大工、石工仕事をこなし、肉の加工においては、町のひとびとが見習うほどである。自家製の酒やソーセージなどを売る店のはのちに酒場にかたちを変え、ますます彼女の酒はもてはやされるようになるのだが、その酒の評判は上々である。

For the liquor of Miss Amelia has a special quality of its own. It is clean and sharp on the tongue, but once down a man it glows inside him for a long time afterward. And that is not all. It is known that if a message is written with lemon juice on a clean sheet of paper there will be no sign of it. But if the paper is held for a moment to the fire then the letters turn brown and the message becomes clear. Imagine that the whisky is the fire and that the message is that which is known only in the soul of a man--then the worth of Miss Amelia's liquor can be understood. (203)

飲むといつまでも腹のなかで燃え続けるという彼女の酒には、特異な、神秘的な効用がある。飲むひとの心をあたため、奥底に隠れている真実をあぶり出すのである。気づかないでいたことや、心の奥深くにひそんでいた考えが、突然意識にのぼって理解されるようになる。ここには、筆を進めるためにかなりアルコールに依存していた作家の心情が吐露されているような気がする。⁶

Ameliaの酒とともにとりわけ重要なのは、彼女が薬草や植物の根を原料として秘伝のあやしげな方法でさまざまな薬を調合し、ひとびとの病気を治療する点である。偉大なる想像力を駆

使し、数々の治療法を症状によって使い分ける。おできの切開などかんたんな外科的手術も行い、傷の縫合も器用にこなす。Ameliaは、危険で異例の治療にも躊躇はしないが、ただどういうわけか婦人病だけはお手上げである。それ以外の点では「立派な医者」として町のひとびとから信頼され(236)、診察料をとらないこともあり、Cheehawの町医者よりも人気がある(251)。楽しみながらどんな病気でも治してしまうAmeliaには、幼少時から病弱で、闘病生活の結果50年の生涯を閉じた作家McCullersの、病苦からの解放への願望が示唆されているのかもしれない。⁷

おなかの虫退治には、“Amelia Miracle Mover”を7服、しゃっくりには水7杯、首の痙攣には貯水池のまわりを7周走るなど(248)；Ameliaの治療法には、まじないめいたところがある。お気に入りの数字7にこだわりをみせるが、これは、「さまざまな可能性を秘めた」宗教的に神秘的な数、「秘儀および呪文を好むひとが重視する」数であると語られる(248)。ここには古代の呪術を思わせるものがひそむ。さらに、新薬の実験では自ら大量に服用し、鋭い痛みにも耐えながらも効能を判断する。薬が体のどの器官に作用するかを見極めることができるという特異な能力がAmeliaには備わっているのである(236)。

Sarah Way ShermanやWestlingも指摘しているように、薬草療法は神秘的連想と絡み合い、女予言者や魔女と結びつけて考えられてきた。⁸ Ameliaの“Kroup Kure”というせき止めの薬はウィスキーと氷砂糖に秘伝の原料を混ぜて作られた特効薬であり(226)、同じ動詞“brew”で表現される酒の醸造と調薬とを行う醸造所は、秘儀の場所といえる。Ameliaは、ここで超自然的な力を存分に発揮するいわば魔女であるかのようにみえる。まさに魔女の秘薬(witches' brew)としてのアルコールと薬の効用があいまって、病気の治療効果が高まっている。

どこからともなく現れ彼女との血縁を主張するLymon WillisにAmeliaが酒食をふるまったのが契機となって誕生する酒場は、町で唯一の娯楽の場を提供するだけでなく、客に特別な「誇り」を与え、人間としての自分の価値を再認識させる(239-40)。みな顔や手を洗って、まるで聖なる場所に入るかのように、礼儀正しく敷居をまたぎ、誇りをもってテーブルにつく。「独身者、不幸なひとびと、肺病患者らは特別の恩恵を被る」と語られるように(240)、酒場の開店は酒と治療の結びつきをいっそう強固なものにする。Ameliaの「治療」は肉体的、精神的な病にもますます効能が期待されるようになるのである。

Shermanが述べるとおり、医学が科学に依拠するようになると、中世の医者や錬金術師の仕事は特定の女性の手委ねられた(206)。そして科学が拒絶した古代の医学的見地はその女たちによっておもに家庭内の仕事として引き継がれていくことになる(Sherman 206)。とくに薬草や産婆術という古代の技術に通じる女性はひとびとに医学的援助を求められたといわれている。⁹ Ameliaはこうした女性たちの系譜に属しているように思われる。民間療法のようなあやしげなものであれ、精神上、肉体上の病を治療する神秘的能力が備わった「魔女」として、Westlingのことばを借りれば、町において「奇妙な支配力」をふるう、政治的にも中心的位置をしめる人物であるといえる(“Amazon” 468-69)。

19世紀ヴィクトリア朝においては、創造性をもった女、自己を表明する力を求める女、つまり男性にとっての理想的女性像(家庭の天使)にそぐわない女性がグロテスクな存在の「魔女—怪物—狂女」とみなされていた。¹⁰ しかしながら、Lillian Fadermanによれば、本来魔女(witch)は、「生命と女性を中心に据える価値観」の表象であった(*Odd Girls* 229)。その魔女に、

「女の知恵」(“wicce”)を恐れた男たちが悪のイメージを押しつけたのである(Faderman, *Odd Girls* 229)。したがって、ヴィクトリア朝にみられた「怪物」としての魔女は男性がつくりあげた虚像であるといえる。

さらに、魔法(witchcraft)の伝統は、古代の母権制崇拝のなごりであると考えられているらしい(Sherman 206)。男性中心主義的社会でいやおうなしに悪と結びつけられた魔女は、フェミニスト的視点からすると母権制社会の中心となりうる権力をもつ存在であるといえる。父権制社会への対抗拠点として有史以前の母権制社会の再構築を目指す、とくに1970年代のフェミニストの一派は、精神的、政治的モデルとしての魔女にとりわけ惹かれている、とFadermanは指摘する(*Odd Girls* 229-30)。レズビアン・フェミニストらは、過去の女の魔力は健康と愛の秘訣に通じ、闘いと生存の術を知ると信じていたという(Faderman, *Odd Girls* 229)。Ameliaは、まさに母権制社会の担い手たる魔女として君臨している。そしてそこには時代を先取りした作家のフェミニスト思想が反映されているように思われる。

Ameliaがその店の繁栄とともにさびれた町を中心となるのに貢献するのは、Cousin Lymonであり、ここには彼に対するAmeliaの途方もない愛情が大きく関与するのであるが、その議論を進める前にAmeliaの「奇怪な」結婚の経験について検討することにする。

III

見世物小屋のフリークたちも「結婚式に出席したり、結婚したりできるのだろうか」という*The Member of the Wedding*のFrankieが感じる不安をよそに(*Member* 272), *Ballad*の「フリーク」Ameliaは、「ぼんやりと」しているうちにMarvin Macyと結婚する。織機の修理工のMarvinは、彼女よりほんの少しだけ背は低い、長身で筋骨たくましい「この地方きっての美男」であり(217)、伝統的な意味でいかにもふつうの男性らしさをもった若者といえる。金回りもよく、もてるのをいいことに数多くのおとなしい娘たちを「墮落させ、辱め」てきた好色なこの男が「孤独で、ひよろりとした、変な目をした」19歳のAmeliaを憧れの的に選んだのである(217)。

彼女にはかなり短い、死んだ母親のウェディングドレスを着たAmeliaは、結婚証明書が読み上げられている間落ち着かないようすでいつもの作業ズボンのポケットをさぐるように手を動かし、式が済むとすたすたと花婿の先を歩いて教会から出ていく。こっけいでさえあるこの姿にはふたりの結婚の行く末が予見されるようである(219)。その夜、Ameliaを追ってMarvinが二階の寝室に入ると、やがて男物の服装をした彼女は怒って飛び出してくる。

男女の肉体関係には、社会における支配／従属という因襲的な権力構造がいみじくも端的にあらわれる。「ふつうの」男性性を体現するような「夫」Marvinは、当然のように女＝妻をモノにしようとし、Ameliaに「妻」として服従する役割を要求したのである。独力で事業に専念し、成功を修め、「魔女」として町をも支配してきた自分が、支配される立場に置かれることは、彼女のプライドに対する侮辱でしかなかった。男性としてのセクシュアリティ／支配力という暴力を振りかざすMarvinこそがAmeliaの自己、地位を脅かす人物であった。結婚が強要する役割、その制度が意味する男女の支配／従属関係をはじめて認めたAmeliaは、法的に夫となったはずの男を拒絶する。

Ameliaは、そうした男女の関係について未成熟な子どものように無知であったのかもしれない

い。MemberのFrankieも、年齢のわりに性に関することには無知である。年上の女の子たちの性的な話題にも耳を貸そうとせず、垣間見た間借り人夫婦のセックスを「発作」と理解する (Member 289)。兄の結婚式の前日、ピンクのドレスを着た彼女は、娼婦と間違われ、連れていかれた安ホテルの部屋であやうく兵士にレイプされそうにさえなる。ナイーヴなFrankieはその男を「気違い」と呼び、怒りを表現する (Member 372)。

Westlingが論じているように、ドレスはセックス・シンボルとしての女性性を誇示するものである (Sacred 177)。男の気を引くような下品なドレスが娼婦を意味する記号であったとしたら、Ameliaのウェディングドレスは花嫁の記号であった。男たちは女の提示するこの記号に反応するが、無知な女はただ憤りを表現するだけである。AmeliaもFrankieと同様の怒りをMarvinにぶつけているにすぎないのであろうか。

ここでAmeliaのドレスの色に注目したい。ヴィクトリア朝以来、白は理想の女性像の象徴であり、具体的には純潔さや、従順さ、か弱さなどを示すとされてきた。とくにその色の意味が具現するウェディングドレスは、花婿に処女性を差し出す花嫁の、「書き込まれることを待つ空白のページ」なのである (Gilbert and Gubar, *Madwoman* 615-18)。ところがAmeliaのドレスは黄色であった。しかも短すぎる。純白の象徴性から巧妙にも免れているようである。この意味で男性に対する従属性へのかすかな無意識的抵抗を含みうるといえる。ドレスに暗示されるAmeliaの抵抗に気づかなかった男は最終的に追い出されることになる。

医者として腕の立つAmeliaにひとつだけ手に負えないものがあつたことを思い出してみよう。

If a patient came with a female complaint she could do nothing. Indeed at the mere mention of the words her face would slowly darken with shame, and she would stand there craning her neck against the collar of her shirt, or rubbing her swamp boots together, for all the world *like a great, shamed, dumb child*. (208; emphasis added)

婦人病ということばを聞いただけで、「子どものように」羞恥心で顔を赤らめ、口もきけなくなってしまう。この点をWestlingは、完全に男性性に同化した自我、子どもじみた性的無垢さに関連づける (“Amazon” 469)。Memberでは大人にはなりたいが「女」にはなりたくないというアイデンティティの揺れが、Frankieを通してあらわされるが、¹¹ 大人になることとは女性としてのアイデンティティを受け入れることを意味するとすれば、Ameliaも女ではなく子どもとしてのアイデンティティに固執していたとも考えられうる。しかしながらAmeliaの備える神秘的な知識や能力は、無垢な子どもとは無縁であり、古代からむしろ女性と密接なつながりをもつ。その特殊な女性性は「じつに奇妙な着かたをする」彼女の暗赤色のドレスにもあらわれるように思われる (214)。そのドレスをAmeliaは日曜などに外出着として着ることにより、Marvinが戻ってきてからはつねに身につけるようになる。¹² 彼女の言動からは、伝統的な意味での女性としてのアイデンティティを誇示しようとしていたとは考えにくい。が、Ameliaには元来「奇妙な」かたちであれ女性性が完全には排除されずに残っていたといえよう。

Ameliaには、医学的意味での女性の性は単に理解を超えていたのではないか。彼女は何年か

前にCheehawの医者に摘出してもらった腎臓結石を、苦しみの代価として大事にもっている(223-24)。手術後いろいろな治療に専念しはじめたのかどうかは不明であるが、自分の病気は治せなかったとなれば、魔女としての力の及ばない領域だったのであろうか。上でも述べたように、古代から薬草及び産婆術の知識は女性と結びつけられ、それが魔女の原像のひとつとなるのだが、婦人病に対処できないAmeliaは出産に立ち会うことすら無理であろう。またAmeliaが全力を尽くして治療を施しても、Lymonは「虚弱で奇形のまま」で頭と瘤が肥大するだけである(214)。はからずも魔女としての限界を露呈しているようでもある。

Ameliaに追い出されたMarvinはやがて「本性」をあらわし、犯罪を重ね刑務所に送られる(222)。けんかで殺した相手の耳を持ち歩いてきた少年時代から、Marvinには悪のイメージが「においのようにまとわりついて」いる(237)。出所して復讐のために舞い戻った町では、刑務所で習得してきたとひとびとが推察する「呪文」をかけて異常気象と荒廃、混乱を引き起こした元凶とされ、夏でも決して汗をかかないのは「一考に価する」と語り手はつけくわえるのを忘れない(237)。ほかにも「二股に分かれた足先」など悪魔(“Satan”)の特徴を露呈する(218, 231)。まるで屈辱を受けたAmelia自身の、男に対する恨み、憎悪を的確に示唆するかのようである。Marvinは、男性としての顕在したセクシュアリティゆえに悪とつながっているようにもみえる。Frankieの願望が叶って「結婚式のメンバー」になりえたAmeliaであるが、勝利にもかかわらず苦い思い出だけを残すことになった。¹³

IV

10日間の結婚後、男の愛には無関心となり独身を貫くが、30歳でAmeliaは、こびとのようなせむし男Cousin Lymonに恋をする。彼は、背丈は4フィートそこそこで、大きな頭、「曲がった小さな脚」とそれに不釣り合いな「大きな湾曲した胸と背中の瘤」(200)といった、ある意味でグロテスクな肉体をもつ。Lymonへの視線や声に露呈するように、Ameliaは深い愛情を表現するが、この愛はAmeliaを大きく変化させる。気前のよさ、寛大さなど美点といえる性質が顕現し、社交的で活発になる(232)。酒場は大きな成長を遂げるなど、仕事面においてもよい影響が及ぼされる。

一方Ameliaの家に住みついてからのLymonは、Ameliaの父親の寝室を使い、彼が愛用していた煙草入れを持ち歩く。ところがその中身は、ココアと砂糖からできたお菓子で、これをたえず口に入れている(210)。服装はといえば、「ふつうの男性」とは違って「ぴったりした膝丈の半ズボン」をはくなど、いかにも子どものなりである(209)。椅子に座っても足は宙ぶらりんで、立っても彼女の腰にまでしか達しないLymonをAmeliaはおんぶして川を渡る(215)。このように、Lymonは一人前の男性というよりも、まるで子どものように扱われる。性格上でもLymonは子どもじみた自己中心性が強い。

奇妙に曲がった肉体からこの男の年齢を推測することさえ不可能で、12歳だという意見も40は優に超すという意見もあり、自分でもいったい10歳なのか100歳なのか皆目見当がつかないと話す(247)。「凝視する青い目は子どものようだが、目の下には年を物語る薄紫色の小皺の影がある」といった顔には、子どもを、そして同時に老人を連想させる側面をうかがわせる(247)。このようにLymonは、あらゆる方法で「男性性」を巧妙に回避させられている。肉体だけでなく、年齢や出自、雰囲気にも神秘性が漂う点では、酒や薬による治療法において神秘的な力を備

えたAmeliaとつながる。Ameliaが魔女であるなら、Lymonはまるで小妖精(elf)のようである。

Marvinが体現するような男性性／セクシュアリティという脅威をLymonは微塵も感じさせない。この点でLymonは、Ameliaにとって自分の支配的地位を脅かされることなく愛を表現できる安心な存在である。「男」としてではなく、子ども、孤独感を癒しあうパートナー、あるいは家族のように慈しむのであるから、当然プラトニックな愛になる。LymonはAmeliaにとってペット同然だと言う批評家もいるが、¹⁴ Lymonは、彼女の熱烈な愛に応えてくれないようにみえる相手であり、一方向的な愛であるという意味で、この指摘は正しい。しかしながらLawrence Graverが述べるように、ペットより悪いことには、Lymonは自分の欲求充足をどんどんせがむようになるようになる(67)。居候の身でありながら尊大な態度をとるようになり、Ameliaを利用しているようにさえみえるのである。

このふたりの肉体的関係については、町の女たちの噂に示唆されるだけであるが、LymonはAmeliaに性的な要求をすることはない。性的不能性が暗示されるといってもよい。AmeliaもLymonも、性差以前の発展途上の段階にとどまったまま、内面的な成長を拒んだ人間のような。「女」として機能しない女と、「男」として機能しない男は、6年間も生活をともにするが、結婚という形態を超え、性を超越した関係を築いているといえる。この物語のもう一組の男女、AmeliaとMarvinの結婚初夜の出来事についても詳細はなんら描かれないことを考えあわせれば、いかなるかたちであれ男女の関係は実を結ばず、肉体的な要素はその記述さえ巧妙に回避されているようにみえる。ヘテロセクシュアルな性を含んだ関係は成立しないのである。いわば中性的なAmeliaとLymonの関係は、肉体的要素、セクシュアリティを排除した精神的結びつきであり、Fadermanの言う女性どうしの「ロマンティックな友愛」を想起させる。¹⁵

McCullersはAmeliaとMarvinの関係において、Adrienne Richの言う「強制的異性愛」(“compulsory heterosexuality”)に伴う苦痛を明示しているように思われる。上でもみたとおり、男女の支配／被支配構造を露呈する肉体関係を当然のものとして含み、男性に特権の権力を賦与する結婚とは、「異性愛」同様、社会つまり男性中心主義的社会に強制された制度である。Ameliaは異性愛を強要する男を拒絶する。そして異性愛的制度に対抗するためにLymonとの友愛と連帯に基礎づけられた関係をつくりあげようとする。異性愛のあらゆる特徴を欠くAmeliaとLymonの関係には、ひとつの同性愛(レズビアニズム)が可能性として暗示されるといえるかもしれない。¹⁶ Ameliaは、女性抑圧の根源である異性愛制度すべての崩壊を切望し、レズビアニズムをつぎのステップと考える女性たち、すなわちレズビアン・フェミニストの姿を彷彿とさせる(Faderman, *Odd Girls* 208-09)。

V

物語のクライマックスとなるAmeliaとMarvinの闘いは、男性性と異性愛制度の体現者(悪魔)とそれに挑戦する魔女との闘いをも意味する。優勢であったAmeliaが勝利に至ろうとするその瞬間、中立を装っていたLymonがMarvinに加担し、彼女はとうとう敗北を喫することになる。町を混乱に陥れた破壊の体現者であるMarvinとは対照的に、Ameliaの人生にも、町全体にとってもきわめて重要な繁栄を生んだLymonが、Marvinを一目見たときから彼の男性性／悪に魅惑され、ここで最終的に悪魔の手下として魔女を滅亡に追いやることになる。¹⁷ はじめてふたりの交わした視線が「犯罪者」のそれにたとえられるように(233)、あらゆる種類の犯罪に興

味を示すLymonはもともと悪と深く結びついていたのであろう。

1970年代、さまざまな神秘的な力を有する魔女を精神的、政治的モデルとして掲げ、レズビアン・フェミニストたちは男性を排した女性の集団が社会を変革させると信じ、父権制社会への対抗拠点として有史以前の母権制社会再創造を目指した。が、「レズビアン・ネーション」(“Lesbian Nation”)創設は夢と消えていった(Faderman, *Odd Girls* 243-44)。その運命を先取りするように、異性愛制度排除を目論む魔女Ameliaは闘いに破れる。

闘いに至る過程のなかでも、Ameliaは生まれてはじめて意志をなくし、Marvinを追い出す手段に迷い、しかもあらゆる手だてが功を奏さなかった。酒と薬に神秘的な技をふるい、町を支配していた魔女もその魔力は衰退の一途をたどっていた。愛の術に通じているはずの魔女も McCullers 作品を貫く愛の一方向性の論理には逆らうことはできず、Lymonの愛を獲得できない。治療の力に限界があったことを先にみたとおり、魔女たるAmeliaの勢力の減退、敗北の兆しが示唆されていたようである。そして、「男性」を排除した集団の仲間であると彼女が信じていたLymonも反旗を翻す。

GilbertとGubarはAmeliaの敗北を社会が強要する女性性を放棄したこと、性の境界を越えて、本来男性のものである支配権を奪ったことに対する罰であるとみなす(*No Man's Land* 105-06)。Westlingも、女性性を拒絶したAmeliaは最終的に、女を罰するような男性の連合により破滅させられると主張する(*Sacred* 176)。ただし、Ameliaは女性性を完全に拒絶したわけでもなく、GilbertとGubarが言うように片方は「にせものの男」であるから(*No Man's Land* 107)、Ameliaは男どうしの連合に屈するとはいいいがたい。

またMarvinとLymonのふたりは同盟して強い支配力を握るのでもない。闘いが終わると彼らはAmeliaの店や醸造所を散々破壊し、金品を奪うなどあらゆる破壊活動をおこなって町を去るだけである。Westlingが指摘するように、Lymonの身体の状態は「繁栄への致命的な限界を示す」(“Amazon” 471)。Ameliaの努力にもかかわらず彼の病が快方に向かわないのは、Ameliaの力が及ばないだけでなく、生命力の欠如したLymonが、破滅の運命に囚われていることの暗示なのかもしれない。Marvinが体現する、悪を連想させるネガティブな意味合いが附与された男性性を欠く点では、LymonはAmeliaにとって有益なパートナーであったが、彼女を裏切ることになる、男性性と結託した生来の悪意のために、永続的な力をもつことが許されていないようである。したがってMarvinとLymonの連合が支配力をふるい、繁栄するようには到底みえない。

結果としてAmeliaは、孤独な状態に戻り、寛大なAmeliaも、繁盛したカフェもその存在を失う。酒の質は落ち、それまで「賢明」だった治療法は残酷さを極める(251)。彼女自身の姿も変貌し、強壮な肉体は年老い、やせ細る。Lymonの帰りを待ちわびるがそれもむなしく、やがて家じゅうを板で囲わせ、閉じこもってしまう。以前は、だれの立ち入りも許さない「砦」として機能していた彼女の邸宅が、ひとびとの社交と娯楽の場としての酒場を経て、いまではまるで文字どおり倒れそうに傾き、監獄のようにみえる(Westling, *Sacred* 181)。しかし、19世紀の文学にあらわれる幽閉される「狂女」の伝統とは違って、Ameliaは外の世界から絶縁する決意表明としてか、自ら閉じこもるのである。¹⁸ このAmeliaの心情を、兄の新婚旅行に同行する計画が挫折したFrankieが代弁しているようである。「監獄に入れられているほうが、目に見えない監獄に閉じこめられているよりまし」だというのである(*Member* 387)。Ameliaはそし

ていわば隠遁者となる。

Graverがこの物語を「Ameliaのための哀歌」とみなすように(67), 作品のタイトルも, このカフェの悲しみ, すなわち孤独なAmeliaの悲しみをあらわし, ここには作者の共感, 同情がこめられているともいえる。¹⁹ この作品の語りがつくりだす枠組みそのものが幻想的なヴェールに包まれ, 現実感を欠いたはかないおとぎ話のようであるが, Frankieが思い描くユートピア的世界が少女の夢物語でしかなかったように, 魔女が永久的な勢力を発揮する, 異性愛制度を排除した母権制社会は実現不可能なユートピアであった。しかしながら, 男性が支配する世界にも限界があることが暗示されてもいる。物語のエピローグ, “Twelve Mortal Men” で描かれる鎖につながれた12人の囚人の歌声は, 「大地そのもの, 広い空」から聞こえるようで, 微妙に「陰鬱」であり「楽しそう」でもある(253)。囚人と同じような閉じた世界に生きることを選んだAmeliaの声も重なりあって響く。この意味ではThe Ballad of the Sad Café は, Miss Ameliaの悲哀の物語だけではないように思われる。ときおり見られる, ひとつだけ開いた窓から見下ろす視線はなお, 作家のフェミニスト思想を託された魔女としての不思議な威力を感じさせるのである。

注

¹ Ballad 213。以下, 本テキストからの引用はページ数のみを括弧内に示す。

² Graver 62-67 参照。

³ この少女は若きMcCullersの分身ともいえる。詳論はCarr 23-24, 29-30を参照。

⁴ Moers 108-09, Showalter 135。

⁵ Carrによれば, Ballad 執筆は1941年, 2年後に出版。1951年にはThe Ballad of the Sad Café and Other Worksとして出版される。Memberの原型となる物語(The Bride and Her Brother)の構想は1936年に生まれていた。

⁶ 対照的にMcCullersの短編(たとえば“Instant of the Hour After”)には, 作家が三度結婚したReevesを思わせる, アルコール中毒の人間が登場し, 飲酒には否定的な意味が与えられている。McCullers夫妻の飲酒については, Carr 139, 152, 160を参照。

⁷ 作家のさまざまな病苦との闘いについては, Carr 2など, Kieft 251-52を参照。

⁸ Shermanは, 19世紀の作家Sarah Orne Jewettについて, ニュー・イングランドという地理的コンテクストのなかで議論している(206-07)。Westling, “Amazon” 469。

⁹ Smith-Rosenberg 15。18-19世紀初頭の女性の医学における貢献, 女性の領域としての産婆術についてはSmith-Rosenberg 228, 231を参照。

¹⁰ こうした伝統と女性作家の関わりについては, Gilbert and Gubar, Madwoman 第1部, とくに27-28, 42, 79を参照。

¹¹ Frankieについての議論は, White 90-93, 104-06にくわしい。McCullersも自他ともに認める“child-woman”であった(Carr 147, 167, 185)。

¹² WestlingはこのドレスをAmeliaの自由を破壊するもの, 男としてのアイデンティティの危機を示すと考え(Sacred 177), Marvin再現以来着ることになる意味としては, 自分から女性性をひきだせなかった男への嘲りであると解釈する(“Amazon” 471-72)。

¹³ AmeliaがMarvinのことを口にするときには決まって「ひどい悪意をこめて」「侮蔑するように」話すのは(222), 勝利者の敗者に対する反応としては不自然だという指摘もある(Gilbert and Gubar, No Man's Land 107)。

¹⁴ Westling, “Amazon” 470。Graverは, Lymonが「犬のように」Marvinの気を惹こうとすると述べる(67)。

¹⁵ アメリカでは19世紀末にその頂点に達した“romantic friendship”については, Fadermanのふたつの著作にくわしい。16-18世紀ヨーロッパにおいてはとくにSurpassing第1部B(“Enshrinement of Romantic Friendship”), 19-20世紀はOdd Girls第1章(“The Love of Women for Each Other”)。

¹⁶ ここには, 作家に明らかにみられたという同性愛, あるいは両性愛の傾向(bisexual tendency)が関与しているように思われる。Carr 110, 167, 295-96; Kieft 252-53参照。

¹⁷ Westling は, Marvinを破壊と結びつく冬, Lymonを再生の精神を表象する春のイメージで対比させる(“Amazon” 470-71)。

¹⁸ この伝統については, Gilbert and Gubar, Madwoman 83-92参照。

¹⁹ 夫と作曲家の男、自分との三角関係を平和に解消しようと、自ら身を退いて孤独になる決心をしたという McCullers自身の経験にもつながる (Carr 170-71)。

引用文献

- Carr, Virginia Spencer. *The Lonely Hunter: A Biography of Carson McCullers*. 1975. New York: Carroll, 1985.
- Faderman, Lillian. *Surpassing the Love of Men: Romantic Friendship and Love Between Women from the Renaissance to the Present*. New York: Quill, 1981.
- . *Odd Girls and Twilight Lovers: A History of Lesbian Life in Twentieth-Century America*. New York: Penguin, 1991.
- Fiedler, Leslie. *Love and Death in the American Novel*. Rev. ed. 1966. New York: Anchor, 1992.
- Gilbert, Sandra M. and Susan Gubar. *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. New Haven: Yale UP, 1979.
- . *No Man's Land: The Place of the Woman Writer in the Twentieth Century*. Vol. 1. *The War of the Words*. New Haven: Yale UP, 1988.
- Graver, Lawrence. "Penumbral Insistence: McCullers's Early Novels." *Carson McCullers*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea, 1986. 53-67.
- Kieft, Ruth M. Vande. "The Love Ethos of Porter, Welty, and McCullers." *The Female Tradition in Southern Literature*. Ed. Carol S. Manning. Urbana: U of Illinois P, 1993.
- McCullers, Carson. *The Ballad of the Sad Café*. *Collected Stories of Carson McCullers*. Boston: Mifflin, 1987. 195-253.
- . *The Member of the Wedding*. *Collected Stories*. 255-392.
- Moers, Ellen. *Literary Women: The Great Writers*. New York: Oxford UP, 1976.
- Rich, Adrienne. "Compulsory Heterosexuality and Lesbian Existence." *Signs* 5 (1980): 631-59.
- Smith-Rosenberg, Carroll. *Disorderly Conduct: Visions of Gender in Victorian America*. New York: Oxford UP, 1985.
- Sherman, Sarah Way. *Sarah Orne Jewett, an American Persephone*. Hanover: UP of New England, 1989.
- Showalter, Elaine. *Sister's Choice: Tradition and Change in American Writing*. New York: Oxford UP, 1991.
- Westling, Louise. "Carson McCullers' Amazon Nightmare." *Modern Fiction Studies* 28 (1982): 465-73.
- . "Carson McCullers's Tomboys." *Southern Humanities Review* 14 (1980): 339-50.
- . *Sacred Groves and Ravaged Gardens: The Fiction of Eudora Welty, Carson McCullers, and Flannery O'Connor*. Athens: U of Georgia P, 1985.
- White, Barbara A. *Growing Up Female: Adolescent Girlhood in American Fiction*. Westport: Greenwood, 1985.